

あとがき『森が茂れば鳥が飛んでくる : 釜山の発展とともに : 金任植回顧録』

三輪, 宗弘
九州大学附属図書館付設記録資料館産業経済資料部門 : 教授

権, 赫建
東義大学校日語日文学科 : 教授

<https://hdl.handle.net/2324/17023>

出版情報 : 森が茂れば鳥が飛んでくる : 釜山の発展とともに : 金任植回顧録, pp.257-266, 2010-04.
花書院
バージョン :
権利関係 :



訳者 あとがき

東義大学校 権 赫 建

2010年を迎えて韓国人が思い起こさねばならない歴史的事件がある。それは今から100年前の1910年に日本が韓国（当時の朝鮮）の国権を奪った事件である。本回顧録の著者、金任植東義学園前理事長は1910年以降の日本の植民地支配下の時代に日本へ留学し、帰国後は釜山商業高等学校の教員として勤務した。後に、与党の民主共和党の国会議員として韓国の政治経済発展に貢献し、日本の政治家とも親交を持った。政界を去ってからは東義工業大学校や東義大学校等を設立して釜山の名門私立大学にまで発展させた。このような経歴の政治家・教育者である人物の回顧録を刊行することは100年前の事件を回想する意味でも、韓国と日本の関係を考えるうえでも意義のある作業であると思う。

私は「一期一会」という言葉が好きだ。九州大学に留学した時に会った言葉なのだが、その意味が「人との出会いは二度と巡ってこない。たった一度きりのものであり、だから一瞬一瞬を大切にすることである」と知って、爾来大好きな言葉の一つとなり、心に刻んでいる。まさに九州大学の三輪宗弘先生とのご縁も一期一会によるものである。

2004年5月に金任植前理事長と私は東北大学、早稲田大学と東義大学校との大学間交流を活性化するため日本へ出向くことになった。仁川空港の休憩室で金前理事長は私に「権先生は九州大学出身だから、今後は九州大学と東義大学校との交流協力を努めてほしい」と指示された。以後、私は金寅燾前東義大学校総長（2010年2月12日に理事長に就任）の指導と協力を受けながら、微力ながらも両校間の交流のためにできる限り力を尽くしてきた。振り

返ってみると本回顧録の刊行は、金前理事長の九州大学との交流協力に対する愛着と執念が契機となったのかもしれない。

2008年春、私の九州大学留学時の博士課程の同期であり現在も九州大学比較社会文化学府におられる松永典子先生が、金前理事長の経歴に関心を持っていた三輪先生を紹介してくださった。そして2008年秋に私の仲立ちで三輪先生は東義大学校を訪問し、金前理事長と会ったのである。ちなみにその際、姜昌錫総長が三輪先生に韓国近代史に関する資料を手渡して回顧録の刊行に積極的に助力された。

このような三輪先生とのご縁がなかったら、東義大学校設立者である金前理事長の回顧録が日本語に翻訳されて日本で刊行されることはなかったと思う。三輪先生の日韓近代史関連研究に対する執念と金前理事長に対する尊敬、そして勇気ある意思表示の賜物である。

正直言って、どれほど国会議員として国を動かす大きな仕事をしたといっても海外での出版である。日本の方々にどれほどの意義があるのだろうかと思うと出版までたどりつけられるか半信半疑であった。しかし、このように完成をみることができ、どんなに嬉しいかわからない。

「金任植前理事長」の回顧録には韓国の産業発展の過程と大学教育そして民主共和党での政治活動が生々しく綴られている。また歴史の裏話や個人の感懐も述べられている。政治家として教育者として今や成功者と言えるであろうが、若い頃は苦難・苦労の連続であった。それをどうやって乗り越えてきたのかを窺うこともできる。この回顧録を通して生きた歴史を学び、幅広い視野から人生を考えることができるのではないだろうか。金前理事長はどんな苦難があっても挫折せず、「やればできる」という信念で乗り越えており、まさに人生を前向きにとらえる「肯定の力」が随所に読みとれる。

ただ回顧録の中には韓国の現状を踏まえており、それを日本の方々がどう受け取るかという心配もなきにしもあらずだが、韓国与党で財務委員長を務めたことが示すように、朴大統領に近い政治家であったということに興味を持っていただけるのではないかと思う。日本では韓国の大学や釜山に関する文献が少ないので、少しでも韓国社会への理解を深める一助になれば本書を

出版した意義があろう。

金任植前理事長は回顧録の日本での刊行を心待ちにされておられました。刊行を待ち望みながら、金前理事長は2010年1月23日に心肺機能不全でご逝去されました。回顧録『森が茂れば鳥が飛んでくる』は前理事長金任植の遺言でもあると私は考えております。印象深い出来事がありました。理事長室で三輪先生と私と3人になったとき、金任植前理事長は貴重な資料を三輪先生に披歴されました。信用しているのだと思いました。この時の感動を忘れることはできません。

最後に、本書を出版するにあたり多くの方々の助力があったので、この場を借りてお礼を申し上げたい。まず、共訳者の「金宥暉先生」にお礼を申し上げたい。金宥暉先生の翻訳を楽しむ取り組みのお蔭で、回顧録の翻訳作業が順調に進んだ。また、御多忙にもかかわらず金前理事長の生家を直接案内し、金前理事長の族譜を詳しく私と三輪先生に教えてくださった東義大学校の金泰寛先生に感謝の意を表する。2部と3部において地図作成の作業が必要だったが、その基礎作業をしてくださった東義大学校教養教育院の鄭柱永先生、そして掲載段階までの最終作業をしてくださった東義大学校教授学習開発センターの金甲東先生と禹定希先生に深く感謝を申し上げる。

また、花書院の仲西佳文社長、二本木一哉氏に厚いご配慮にあずかった。特に、監修してくださった九州大学の三輪先生と出版を引き受けて下さった花書院の二本木氏また、ライターの緒方章子氏には原文中の不明箇所についていろいろご教示をいただいた。末筆ながら、心から感謝を申し上げておきたい。

(2010年4月記)

